

発刊にあたって

神奈川大学日本常民文化研究所として奥能登時国家調査を本格的に開始してから二十余年、ようやく『時国健太郎家文書目録』を発刊できることになった。時国家の方々をはじめ、時国家文書に関心をお寄せいただいた多くの方々には、遅きに失したことを深くお詫びしなければならぬ。また、田上所員の「解題」にもあるとおり、全文書の完全な目録にはできなかったことについても、我々の力量不足を痛感させられている。さらに、時国調査の行く末に心を残しながらあの世へ旅立たれた故網野善彦氏にも、申し訳ないという思いが募る。

振り返ってみれば、奥能登時国家調査は、我々所員・スタッフにとって始めて取り組んだ悉皆調査であり、総合調査であった。そこには多くの失敗もあり、反省点もあったが、同時にそれは、調査に携わった者にとっては貴重な経験ともなった。総計すれば、三百日近くにはぼる現地調査の間、宿舎のホテルの一室で、時には夜を徹して調査をめぐって様々な問題を議論してきた。文書整理の方針、所蔵者やその関係者との関係、歴史を掘り起こすことが地元にとって持つ意味、地元の研究者との関係、異なる専門家とどのような協力関係を作るか、調査は研究者が研究するためにおこなうのか、など調査に伴うありとあらゆる問題について、激しく議論を闘わせてきた。その意味で、調査は試行錯誤の連続でもあった。そして、それらの問題にすべて答が見出されたわけでもなかった。

しかし、それらの苦しくもあり、楽しくもあった経験は、調査に参加した者の記憶にしっかりと留められているはずである。そして、その経験が、次の調査や研究に生かされていると信じている。そうした貴重な経験の場を与えていただいた時国家や地元の方々に、あらためて感謝の意を表したい。また、現地調査を終了し、目録の作成という大変根気の要る作業に当たってくれたスタッフにも深く感謝したい。

先に述べたように不十分なものとはいえ、目録の部厚い原稿を目の当たりにして、一つの調査が形を成すまでにかかった時間や労力、精神的エネルギーの膨大さを思い、その重さをひしひしと感じる。この上は、本目録ができるだけ多くの方々に利用されることを願うばかりである。

神奈川大学日本常民文化研究所長

橘川 俊 忠